



## 升麻葛根湯

出典は、宋代の太平惠民和剤局方よりも遡る「小児薬証直訣」（錢仲陽）に初めて出ています。「時気瘟疫（季節の変化による瘟疫）、頭痛発熱し、肢体煩疼し瘡疹未だ発せざるとき、あるいは擬似の間に宜しく服すべし」とあり、「麻疹・痘瘡・猩紅熱などのように、発疹を伴う熱性病の初期、または流感の頭痛甚だしく脳症状のあるものに用いる。」（森道伯は、インフルエンザの高熱から脳症をきたしたときに、升麻葛根湯に白朮、川芎、細辛を合わせて著効を得たと報告されてます。）「眼痛み、鼻乾き、衄血（鼻血）し、不眠などがある。インフルエンザ、麻疹、猩紅熱、水痘、衄血、眼充血、皮膚病、扁桃炎などに応用される」ということです。

升麻葛根湯は、どちらかというとな陽病の薬方（桂枝湯や麻黄湯類縁）と考えられていますが、太陽と陽明の併病という印象の薬方になります。したがって、悪寒はあまりなく裏熱というか熱症状の強い方に与えます。子どもの場合、感冒性の下痢などは陽明病の症状ですから、適応となる場合は多いですね。葛根湯に石膏を加える・・・そんな処方イメージです。ですから、「発疹」にこだわらず、傷寒・中風・陽明という感じで、「頭痛・身体疼痛・発熱・瘀熱・口渴・・・眼が痛み、じっと寝てられない」方に適応となります。結構幅広くつかえます。手足口病にもいいですし、麻黄が入っていないので、葛根湯で夜眠れなくなる方にいいですね。